

第30回日本ジオパーク委員会議事録

日時：2017年5月21日 9:30-15:00

場所：幕張メッセ国際会議場（申請地域プレゼンテーション）

幕張メッセ国際展示場（机上審査）

<委員長>

尾池和夫 京都造形芸術大学学長 (日本地震学会)

<副委員長>

中田節也 東京大学地震研究所教授 (日本火山学会)

<委員>五十音順

浅野眞希 筑波大学生命環境系助教 (日本第四紀学会)

欠 阿部宗広 自然公園財団専務理事 (関係団体)

大野希一 島原半島ジオパーク事務局次長 (日本火山学会)

菊地俊夫 首都大学東京 都市環境科学研究科教授 (日本地理学会)

佃 栄吉 産業技術総合研究所 特別顧問 (日本地質学会)

中川和之 時事通信社解説委員 (日本地震学会)

成田 賢 全国地質調査業協会連合会会長 (関係団体)

橋詰 潤 明治大学研究・知財戦略機構特任准教授 (日本第四紀学会)

平田大二 神奈川県立生命の星・地球博物館館長 (日本地質学会)

宮原育子 宮城学院女子大学現代ビジネス学部教授 (日本地理学会)

<顧問>五十音順

伊藤和明 防災情報機構特定非営利活動法人会長

欠 小泉武栄 東京学芸大学名誉教授

高木秀雄 早稲田大学教育・総合科学学術院教授

町田 洋 東京都立大学名誉教授

<APGN 諮問委員>

渡辺真人 産業技術総合研究所 地質情報研究部門地球変動史研究グループ長

<日本ユネスコ国内委員会>

秦 絵里 文部科学省 国際統括官付国際統括官補佐

仙台文子 文部科学省 国際統括官付ユネスコ第三係長

<関係省庁（オブザーバー）> 建制順・省内五十音順

遠矢駿一郎 内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局主査 (午後欠席)

渡辺大輔 内閣府地方創生推進事務局参事官補佐

土屋 常 内閣府地方創生推進事務局

松本直美 外務省 大臣官房国際文化協力室外務事務官

柴田伊廣 文化庁 文化財部 記念物課文部科学技官

大城久尚 国土交通省 水管理・国土保全局砂防部砂防計画課地震・火山砂防室 火山対策係長

高橋明日香 気象庁 地震火山部火山課 火山防災情報調整室 噴火予知防災係長

松平定憲 環境省 自然環境局国立公園課国立公園利用推進室係長

<事務局> 机上審査

斉藤清一 JGN 事務局長

下平明彦 JGN 事務局次長

内藤朋子 JGN 事務局員

プレゼンテーション 質疑応答部分

【立山黒部】 質疑応答

委員：日本には 8 つの（ユネスコ）世界ジオパークがあり、隣には糸魚川ジオパークがある。

その中でユネスコの世界ジオパークに加入するということは、これまでにない新たな価値を見せないと、わざわざ日本からもう一つ加えようとはならない。その点について何かあれば教えてください。

立山黒部：まさに糸魚川とは隣同士だが、世界的な価値があると考えており、全く類似したものが隣接しているとは思っていない。逆に非常に異なる特徴を持つ。例えば花崗岩。これが山脈を造る。世界でも唯一の若い花崗がでてくるとい特徴があるので他のユネスコ世界ジオパークが隣接していても全く妨げにはならない。これは地球の活動を知る上で非常に良い材料。今後は隣県のメリットも活かしながら世界のネットワークに貢献できたらと考える。ヒマラヤとの交流も同様に考えている。

委員：地球科学的な観点でのお話かと思うが、他と違う活動は何かあるか。

立山黒部：それは学術的な貢献だと思う。この地域が持っている学術的な価値。山脈がなぜできるのか、プレート境界や花崗岩はどのようにできるのかは世界的にまだ解明されていない議論中の大きなテーマ。それを具体的に分かりやすく紹介できる場所であるので学術的、教育的な場所として活用されてきていると思う。

委員：ネパールのジオパークを支援しているということだが、支援している主体は誰で、何をしてらっしゃるのか。

立山黒部：ネパールのジオパークは地質的な共通項がある。古くから立山黒部地域とネパールの、特にシェルパと交流があることでそれに対して支援をしてきた。ネパールのトリブバン大学の地質学教室の先生方とやりとりをしている。ネパール政府のユネスコ担当者ともネパールのジオパーク事情について話をしている。

委員：ジオパークの運営団体が何をしているかということを知りたい。

立山黒部：協会の会員が古くからネパールと交流をしていて・・・。

委員：もともとやっていたことではなくて、ジオパークが何をしているかを知りたい。

立山黒部：協会の会員となってジオパーク事業を・・・。

委員：それでは、たとえばインテックの業績はすべて立山黒部の業績になるのだという考えで説明されている、と理解してよいか。

立山黒部：いえ違います。民間主導の良いところだと思うが、ジオパークというものに集束していままでのノウハウを会員になって活かしてジオパークに貢献していこうという活動は、ジオパークが始まってからの活動。

委員：地学的価値とそれにまつわるストーリーを語っていただいたのだが、例えばジオパークに携わっている方の間でどれくらい定着しているのか。

立山黒部：例えば、「くろべ水の少年団」という小学校向けに黒部川の水生生物の調査や地質について一般の方が指導している。今、36名の登録ジオガイドと121名の認定ジオガイドがいる。また民間企業がジオパークをどう活用するかということについて研究しながら自社の広告のカレンダーにジオパークのことを紹介してもらっている。

委員：例えば観光客として立山黒部アルペンルートを観光したとしたら、今日お話しされたようなことが感じられるのか。

委員：立山黒部観光の従来の教育がどれだけされていて、今のような話がどう徹底されているか、それが多言語対応されているか、どの程度できているのか。いまプレゼンされたネオ花崗岩などの新しいストーリーは浸透しているのか。実態を紹介してほしい。

立山黒部：民間の社員にはジオパークの研修をもともとしてしているが、このたびの世界申請にむけて新しいストーリーやテーマについて、特にネオ花崗岩について特に大きく取り上げてほしいという点についてはこれから考えなくてはいいけないが、基本的に水の旅、水循環というところでは立山連峰、扇状地などについて働いている方々は共通認識をもっている。最近ジオガイドの方々が留学生や海外からの観光客にジオツアーを行っており、少しずつ定着していると考えている。

立山黒部：チラシをもってきた。黒部宇奈月観光局さんと連携し、黒部峡谷満喫の旅を今年度は10回計画している。それに希望する方にはジオガイドがつく。また出前講座としてジオの話を見せていただいている。

委員：立山黒部アルペンルートに一般でケーブルカーやバスで行った際に受ける説明が、ジオパークになってからどう変わったか、ということを知りたい。どのように従業員教育が行われたか、ガイドやバスの運転手がどう変わったか。

立山黒部：まず北陸新幹線の黒部宇奈月温泉駅前に地域観光ギャラリーという施設がある。そこで黒部宇奈月観光局の人が観光案内をしている展示がある。毎日2回環境局の方が、来た人に対して展示をみせながらどのような地域なのか紹介している。まず入口として、週末に

は地域のガイドの方が、立山黒部ジオパークはどういうところか地図などを使って名所を説明している。

立山黒部：一般の人がアルペンルートでどのようにジオパークで大地の成り立ちを体感しているかということについては、日本語、英語、中国語の解説をテープで流している。ジオパークになってからどのように変わったかという点は、バスの運転手さんの生音声で伝えることも考えている。国際対応についてはこれからしっかりしたシステムを作らなくてはならないと考えている。ツアーだけではなくジオを感じられるようなシステム作りを協会だけでなく、民間企業や観光局にもお願いしているところだ。

委員：ジオパークはどうしても山のほうに話が集中してしまうが、富山市内における市民のジオパークの一員だという実感や、富山市内に入ったらずでジオパークを感じられるようになっているか、平野部、都市部でのジオパーク活動について教えてほしい。

立山黒部：ジオパークを感じられるには、やはりガイドの説明が効果的だと思う。富山市は基本的にレジデントシティであり、防災に関してどのように堅硬な都市にするかということについては富山市が積極的にすすめようとしている。一般市民が知ることができる機会というと、市民大学や生涯学習活動になる。そこで新しい講座を開講し、地域の成り立ち、災害に対して積極的に発信しているつもりだ。

【国引き】 質疑応答

委員：まず、なぜ今、ジオパークの申請に至ったのか。

国引き：出雲の国だけにある風土記の冒頭にある古代出雲文化は、まさにジオの恵みが育てたということ、島根半島の北山山脈の山を見ていて気づいた。出雲国造が風土記を編纂する際に、新羅との交流、能登半島との交流を含め、環日本海で活躍した島根半島の重要性を強調した。その想いをここに国引きジオパークとして発信したい。

委員：つまり、地域の合意形成ができたからということでしょうか？

国引き：はい。合意形成できています。

委員：風土記は国家的事業で作られた。作ることによって地域のアイデンティティ、ダイバーシティを世に知らしめる、まさに政治的アクションだと思う。ジオパーク事業というのも簡単ではない。既存のものを組み合わせてジオという言葉をつけて申請するのではなくて、新たに自分たちの存在、アイデンティティを示すもの。どこまで皆さんが決心しているのか。そのエビデンスは何か。なぜ出雲市と松江市だけに限定して国引きジオパークとして、新たな風土記を作るような活動になり、どれくらいの重い決意をされたのか伺いたい。

国引き：専門員から話をさせていただく。国引き神話のストーリーに語られていることは、地質学を専門にしている立場からすると全く遠い世界。一方、地質学的立場からだと島根半島、宍道湖・中海を研究していて気づいたことは、この地域が1000万年2000万年前にかけて多大な褶曲や断層を伴っているということ。まさに国を引いてきた。それを皆さんに伝えることで風土記の世界が非常にわかりやすくなった。この地域は一丸となって取り組める環境が今ようやくできたと思う。

委員：ジオパークという地形地質学的な現象と神話というのがどのように結びつくのか、非常

に難しいのではないかと思っていたが今の説明でなるほどと思った。また朝鮮半島などの人々の交流はどのように見せていくのかを教えてほしい。

国引き：その交流の証拠は考古学的にも存在する。能登半島もまわってきたが、まさにそこには出雲との深い交流の歴史があった。糸魚川との関係もある。ジオだけではなく人の交流も含めて国造が残したかった気持ちがわかるようになってきた。みんなのふるさとの誇りとしてそれを育てるためにも是非この地域をジオパークにしたいという思い。

委員：ジオとして人の交流があったエビデンスがあるともっとよいと思う。エリアの設定が、島根半島と平野部と南部の山地で、そのひとつひとつは神話との関係がわかるが、3地域がひとつになったときのジオパークとしての一体感はどのような意味があるのか。

国引き：南部エリアの基盤は花崗岩。ある意味、地層は安定しているが、宍道低地帯。

人は安定した大地に住みたいので、実際の文化が生まれてくるのは平野であり、南部である。地質との関係が大きい。

委員：運営団体は松江市と出雲市と大学か。どのような構造になっているのか。

国引き：今この協議会が松江市、出雲市の行政とこの地域の経済界である商工会議所、島根大学、さらに神社関係者、考古学関係者、住民ガイドなど様々な方々で構成している。この4月から松江市役所の中にジオパーク推進室を立ち上げた。室長と3名の専任職員を配置しており、ここを中心に活動している。

委員：この組織は持続的か。つまり、首長が変わると方針が変わったり、大学も学長が変わるとジオパークを辞めてしまったりするが。

国引き：続けたいと思っている。そのためにはある程度、自分達で自主財源を獲得していきたいと思っている。有料ガイドの仕組みも考えていく。

委員：南部については丘陵地と書かれているが、地形学的には山地というのが正しいので表現を変えたほうがよい。風土記の中で南部の山地の重要さがあると思うがヤマタノオロチ伝説の洪水の歴史や、防災との関わり、埋め立てられて海岸線を前進していく歴史、たたら産業との関わり等は花崗岩と非常に密接な関係ある。そこが表現されていないのが残念。学術的な低地帯の発達は文化生活と関わりが深い。その辺の学術分野の今後の方針を伺いたい。

国引き：関わりがないと言っているのではなく、非常にある。中国山地の花崗岩地帯については入れてもよいのだが、ストーリー性の上で焦点を絞りたい。この共生地域が地質に合う。松江市と出雲市、これがちょうど一部花崗岩を含むが、ほとんどが火山岩地帯。それを無視するのではなく、お互いにそこを共有し合いながら出雲平野が使われていったストーリーを演出しているつもりだ。

委員：もう少し検討してもらいたい。また、申請書には島根大学の国引きジオパーク研究センターとの関わりがあり、重要な役割をした、とある。やはり大学が主体となっているジオパークで茨城県北がある。そこから何を学び、ジオパークと大学との関わりがそことはどう違うか。

国引き：大学に来た時に国引きプロジェクトというのを作ったが、あくまでも学術分野をアピールして、行政や地域住民にいかに効率よく伝わるのかを考え、地質、地形学の基本的なところを一般人にとって馴染みの少ない分野を広めていく。そのための手段として神話を使っている。まさに国引きの大地はストーリー性があるが、大学としては延々と同じことを続け

ていくことは考えていない。あくまでも学術的な部分を担い、行政は一般市民といろいろなことを企画してもらうという棲み分けを考えている。

委員：個人的な感想として、茨城大学と島根大学を同じように感じていた。もっといろいろな分野の先生を入れてもらうことが重要かと思う。

国引き：大学のほうでは、学術面をサポートしているのだが、文科系や教育系の先生がいて10名で構成されている。ジオだけでなく、文化、歴史、食などについてもバックアップしている。もうひとつ大きな貢献は、学生にジオパーク学という授業を行っている。それは国引きジオパークだけではなく、日本および世界のジオパークの状況を学生に教えて、日本ジオパークのネットワークに貢献するという意味で教育活動をしている。

委員：少し安心した。気になったのは1年生が300人くらいで、2年生が6名くらいとあったので寂しく感じたこと。

委員：ジオパークは基本的に科学的根拠を必要としているが、さきほど地質学的事象と神話がつながったので説明がしやすくなったということだった。しかし、明らかに人類がいない時代のできごとであり、神話に残るわけがない。人間がいなかった時代の神話を使うことがジオパークとしてふさわしいのかどうか。神話の話と大地の話は、似ているが基本的には違う。違うがおもしろいのだということと言わないと混乱させてしまうのではないか。ジオパークの基本としてその点をどのように考えているのか申請書では見えなかった。そのままではないへん危険ではないかと思うがいかがか。

国引き：委員のおっしゃるとおりだ。容易に混乱してしまう。われわれはあくまでも事象を淡々と語っていく。一般観光客、地域住民が事象を理解する上で神話とリンクする時に、われわれとしては科学面でとどめておきたいと思っている。そこからいかに神話的な話、歴史文化的話にもっていくのかは、いろいろな地域活動をされている方たちの想いも含めながら話を作っていくということを考えている。

委員：審査基準の基本なので、その点をどう考え、対応しているのかを現地審査で見極めた

【土佐清水】（質疑応答）

委員：ラパキビ花崗岩はどのようにしてできるのか。

土佐清水：簡単に言うと、花崗岩マグマと玄武岩マグマが奇跡的に融合するとできる。本来の花崗岩とラパキビ長石の結晶があるが、結晶晶出順位が逆になっている非常にめずらしい花崗岩。北欧やアメリカではよく見られるが日本で大規模にみられるのは足摺岬だけ。また世界一若いラパキビ花崗岩であり、花崗岩のでき方の解明にもつながる。

委員：1300万～1500万年前の堆積物がでてきたが、その頃の時代に形成された泥岩互層には価値があると申請書には書かれており、特に生痕化石はとても特異なものだと書いてあるが、どのような価値があるのか。

土佐清水：私は堆積岩について協力している。1700万年から1500万年くらいの浅海成の地層。ちょうど日本海が急激に開いて、一方で南方では新しく厚いプレートが沈み込むか、沈み込まないかの時代の地層。世界的にみて非常に活発で特異なテクトニックなセッティン

グにある地層。この研究は十数年続けてきているがようやく成果を公表できる段階になってきた。年間に20センチ、高さが1メートルくらい日本海が開いてくるような時代で、大量の津波堆積物がある。数年前に日本地質学会でポスター賞をいただいた。この研究については世界で初めてのモデル化で今まさに投稿論文を準備している。内陸の四国山地のあたりにある久万（くま）層群という地層に記録されている活発な隆起と浅海成の構造運動によってできた堆積する場所が三崎層群という地層で、最低で見積もって1000年で2.3メートル以上をはるかに超える堆積物が記録されており、そこには世界的に特異な生痕化石群集が見つかっている。2015年に世界13か国の国際会議を開催し討論し、まだまだ発表していないのだが、国際地質学会で開催地に選ばれている。少しずつその特異性が明らかになりつつあり、まだ申請書にすべて書ききれない部分があるが、非常におもしろい地層であることには間違いない。

委員：そういう点が土佐清水の個性であり特徴だと思う。それを子供たちやガイドさんにどのように伝え、さらに、ガイドさんたちは学術的な事柄をどのようにお客さんたちに伝えているのか。どういうところで数百万年前の大地に感動し、お客さんにどのように伝えたのか、内容でなく、谷口さんの気持ちを伺いたい。

土佐清水：生まれ育ったところだが、地質的なものを知らなかった。養成講座を受けて自分が遊んでいた場所が1500万年前の海底にあったものだと知り、だからここでタコや貝が採れたり、でこぼこの岩があったりするのだと思った。それが当たり前だったのだが、お客さんからみるととても変わった岩であり、それをどのように説明したらよいか勉強したときに自分の中で感動があったので、それを伝えたいと思った。

委員：さきほどのお話は簡単には子供たちや一般の人達には伝わらない。不思議だと思うことに対して学術的な背景や説明をしないと間違ったことが地域に伝わってしまう恐れがあるので、背景を的確に拾っていくことがジオパークには非常に重要であり、今後もこだわってほしい。

委員：申請書でわからなかったことがずいぶん分かるようになった。しかし、土佐清水がジオパークとして一番何を伝えていきたいのか。また半径20キロ以内のコンパクトなジオパークにいろいろ詰まっていた他地域との差別化ができる、とあったが、このコンパクトの意味はどのように考えたらよいのか。

土佐清水：何を伝えたいのか、という点は何をめざしたいか、ということ。ジオパークで観光客を増やしていきたい。現状では観光客が伸び悩んでいる。訪れたいと思ってもらえるジオパークを目指して観光を重点におきたい。

土佐清水：コンパクトについては、狭いからよいというのではなく、コンパクト＝4つの大地のつながりがわかりやすいということ。例えば深い海と浅い海の大地があるのだが、黄色と緑の境界に立つと東側と西側で地形が全く違うことがわかる。西のほうは山がちで、黄色のところは平坦な大地で、砂岩でできている。それぞれ作物が違って、黄色は米。違いが非常にわかりやすい。火山の赤のところと緑のところのそれぞれの地形も価値があるが、つながりがわかりやすいことでコンパクトに見え、さらにその4つの大地がつながってみえる。

委員：4つ違うことは把握できるが、それが何を意味するのかが少し分かりにくかった気がする。申請書の中では、協議会の中に部会を置いてすすめているので良いことだと思った。活

動歴を拝見するとほとんどがジオサイトの選定やツアーであり、昨年度に集中して活動されている。今、発見をされている段階なのかなと思う。それをお客さんに提供していくまでの熟度の問題についてはどのように考えているか。

土佐清水：観光を大きく進めていきたいと考えている。昨年、ジオガイドの第一期生が誕生した。それぞれが勉強して今までになかった地域での観光ジオガイドコースを今作り上げており、ようやく成果が徐々に見え始めた。今年は予算的にも計画的にも、土佐清水にきて今までの観光コースとは違う商品を作り上げようという計画で予算をたてている。年度末には決定できて次年度には発信できる。

委員：今日のプレゼンで最もジオパークらしいと感じたのはソウダガツオの漁場の説明。コンパクトという説明をしたが、どこの地域とつながって自分達に恵みがもたらされるかの説明が大事だと思う。そのような観点で、もう一度自分達の個性や強みを表現できるような活動をしてほしいと思った。

【十勝岳】（質疑応答）

委員：まず組織について。運営員会、各部会、事務局という形で組織が作られているということだが、年間何回くらい会議を開いているか。意思疎通のための会合を開いているか。

十勝岳：部会に関しては地域・普及、防災・教育、観光・ツーリズム、産業、行政の5つの部会で組織している。各部会については年間5~6回開催している。各部会で方針が違い、専門性を活かした活動をしている。

委員：組織体制においてユニークな特徴は何か。

十勝岳：51の団体で構成している。その中には商工会や農協などの小さい団体、婦人団体、老人クラブの団体等様々な方々が含まれ、意見をもらい、またジオの魅力をそれぞれに語ってもらう。行政部会も設置しており、北海道開発局、国土交通省などから助言をいただきながら協議会をすすめている。

委員：地域の方々への浸透度はどう考えているか。

十勝岳：住民活動は非常に広く、300名から400名のボランティアによるゴミ拾いの組織がある。今回のジオパーク構想について彼らが非常に協力してくれている。われわれの取り組みをさらにすすめていく想いで取り組んでくれている。

委員：地域の方々非常に意識してくれて、その意見を取り入れながら活動をすすめていくと理解してよろしいですか。もうひとつ、申請書には予算のことが書いてあったが、どこから資金が提供されているのか。

十勝岳：申請書に過去の実績と今後の見込みを掲載している。見通しについては800万で計上している。内容は部会の運営費や施設費、他のジオパークとの交流の他、ジオの教材の作成とノベルティー商品を検討していきたい。

委員：使い道も重要だが、なぜ予算のことをお尋ねしたかということ今後どのような体制にしていくのかということにかかわってくるから。今は美瑛町と上富良野町の予算からという理解でよいか。これから資金を協議会で集めていくということは何か考えているか。

十勝岳：今持っている資源を多くの方々に見ていただいている。最近インバウンドで海外か

らのお客様にも来ていただいている。そのなかで、写真を撮るため個人の耕作地に一般人が入ってきたり、青池に足を入れるようなこともある。このままでは地域の保全が危ういのでどのように保全について理解してもらえるかを考えている。そこで有料の駐車場の整備や、写真を撮る場所を設定するなどの取り組みをして独自の財源の確保も考えている。

委員：ジオパークを目指すということに何を考え、変えようとしているのか、地域の課題解決として考えているのか、新しい展開を求めているのか。

十勝岳：固有の地質、地形の財産から生まれる風景、農畜産物、また大正時代に発生した大正泥流から144名の方が亡くなるという歴史を正しく内外に伝え、価値をもう一度見直していきたい。美しい風景を知識も加えて見ていただきたい。

委員：この地域は火山防災のモデル地域だと思う。融雪泥流対策が最重要課題。ハードの対策としては、今日話になかったが、富良野の家ではそれぞれ砂防施設が整備されている。富良野には日本一と言っているくらいのスリットダムがある。それらをジオの活動のなかにどのように位置づけていくのか。また、ソフトの面ではハザードマップの問題がある。確か日本の活火山でハザードマップが作られたのは、十勝岳が、北海道駒ヶ岳に次いで二番目だったと記憶している。1988年12月の噴火をうけて見直しがされ、かなり詳細なハザードマップに変更された点でたいへん評価された。それから30年も経つとかなり風化をしてきているのではないかと意識の風化が進んできているのではないかとという危惧がある。よってハード、ソフト両面の防災対策というものをジオの活動のなかにどのように位置づけ、活用していくのか。

十勝岳：まずソフトの面。スリットダムは東洋一ともいわれている。小学生の副読本にも載せている。定期的に北海道開発局の協力をいただきながら学習会を継続的に行っている。特に子供たちには火山と十勝岳がどのように向き合ってきたのかの歴史をしっかりと根付かせていきたい。ハザードマップ等も直近のデータに基づいて見直し作業をしており、常に最新の情報を提供できるようにしている。美瑛の防災とジオパークとの関係については88年の噴火からは時間が経っており、前町長の時代から防災意識を高めることには苦勞している。地域のことを学ばば学ぶほど我々の地域が十勝岳の噴火や活動がもとになってできたということ再認識する。住民の方々に、いざ噴火となったときに美瑛町、上富良野町の一部だけではなく常に危険はあるのだということを経験の取り組みの中で盛り上げていきたい。

委員：一般の人は富良野というと丘陵地を思い浮かべると思うが、その波状丘陵のでき方が申請書からはよくわからない。河川の下刻が少ないというのはあると思うが。例えば周氷河地形といってもぴんとこない。どのようにできているのか、全てまだ解明されていないとあるが、どのように伝えていくのか。

十勝岳：波状丘陵ですが、もとになっているのは180万年前の火砕流堆積物。その火砕流堆積地形がある程度残っている。侵食があまり卓越していない。それは北海道ということで強雨の頻度が少ないこと。侵食の過程ですが、サハリンの北くらいの環境にあり、面的に侵食をうけた可能性がある。地殻変動が激しい場合だとますます火砕流堆積物にますます侵食されるが地殻変動が少ないことが作用して形成されたと考えられる。

十勝岳：補足です。まさにわかっていないというのが事実。可能性としては今言ったように地殻変動が少ない。富良野あたりは非常に地殻変動が少なく堆積後に変形しなかった。高低

差が生まれなかったので侵食作用が強く働かなかった。富良野盆地、上川盆地は空知川により上流の盆地側が緩やかになっている。複合的な要素があるが実はよくわかっていない。わかっていない原因は、地質学、地形学、土壌学など様々な地球科学分野において、ばらばらに対象をとらえているため、より学際的な研究のしくみを作りたい。

【那須烏山】（質疑応答）

委員：しっかりしたプレゼンだった。申請書とプレゼンを拝見して皆さんの気持ちはよくわかる。しかし、ジオパークはそれだけではうまくいかないということはいくつかのジオパークをみて非常に感じているのではないかと思う。そこで、日本ジオパークとなるために何が欠けているのかをわかっているのではないかと思う。その点を伺いたい。

那須烏山：全体的に足りないといえば足りないのですが。まだジオツアー等、全体として取り組むという点では組織を立ち上げて活動し、まだ模索している段階。どのように進めていけばいいのかまだつかめていないところがあるかもしれない。しかし組織の中には商工会や金融、市内の産業に入ってもらい、みんなで考えるような組織作りをしてきた。何をしたら伝わるのかみんなで考えていきたい。

委員：一番重要な点はそこ。ジオパークに申請するという事はジオパークとしてここまでやってきたから日本ジオパークのレベルとしていかなるものか、というのが申請。しかし、ジオパークとしてこうやりたい、こうありたい、というのは素晴らしいことだと思うが、こうやりたいと思ってやった結果、今ここまでできていて、すでに日本ジオパークのレベルだと主張していただきたいのだが、その主張がなかった。せっかく来たのだから、日本ジオパークのレベルとして達しているところがあれば説明していただきたい。

那須烏山：那須烏山市全域がジオパーク構想の中に入っている。有形無形の文化遺産があり、それを見直すことが地域の活性につながると思う。昨年の12月には烏山山鉾行事がユネスコの無形文化遺産に正式登録となった。来年築城600年となる烏山城がある。また、烏山高等学校の烏山学もスタートしている。また組織として専門員を含むジオパーク推進室を室長以下4人体制で設置している。さらに県立博物館の支援も得て、産学官民における連携協議が整っている。今ある貴重な資源をさらに磨いてジオ観光と称し、全国から多くの交流人口を増やし、ジオパーク構想の実現化を図りながら自立し、稼げる自治体になりたい。

委員：いろいろな形のジオ遺産があるというような話だったかと思う。それだけではジオパークは難しいと思う。例えば今、市民の方々がどれくらい知っていて、どんなジオパークを望み、それを作ることを応援しているのか事例を伺いたい。

那須烏山：どれだけ一般市民が知っているかということについては、広報誌で昨年度2度特集を組んでいる。地元の新聞社に依頼して、ジオサイトに関する記事を掲載してもらっている。29年度の広報誌で毎月ジオについて周知活動をする予定。観光客に来てもらい、買ってもらえるような地元の商品化を考える活動もしていきたい。

委員：これから広報していくというお話だが、持続可能性という観点で、本当にこのジオパーク活動が未来へ続いていくのか、途中で廃れてしまわないだろうか、という点が我々の審査における視点のひとつ。その点、どの程度担保を取られているのかというのがこの審査。広

報活動をしていくという話があったが、今ジオパークで苦労しているのが広報活動だけで、一方だけの活動だけでは地域の方々はジオパークを理解してくれないのではないかと。どの程度、他のジオパークの状況を本当に研究されたのかどうか。また、その結果として日本の他のジオパークでないものがここにあるのかどうか。

那須烏山：市民への普及について。協議会の組織とは全く別に、意識のある人たちで勝手に集まる組織を作り、自分達で勝手連と呼んでいる。それでは全体の推進にならないので勝手連の活動状況を推進室のほうにも伝えて推進室の方にも参加してもらっている。広報に参加する意識をもってもらわないといけないので、特に公募もしないし口コミで集まってもらうことを故意にしている。そのメンバーは今20名程度だが、地元の食堂や身の周りでジオに参加している体験談を話すことを皆でやっている。そのようにして関心度をあげるようにしている。本当はこの勝手連をはやく無くしてしまいたい。要するにそれがなくても十分に動く状況になるようにしたい。おそらく今年度中にはかなりの人を巻き込むだろう。まだ動き出して半年も経たないのではなかなか成果を発揮できないが、そのような人たちが活動の中核になってもらえればよいと考えている。

委員：テーマに移りたい。那須烏山以外の日本全国の人が、里山里川と言われたとき、那須烏山をイメージできるか。このへんのテーマも含めて那須烏山のジオパークとしての特殊性をもっと検討すべきではないか。また、中学生のプレゼンには心から感銘を受けた。

委員：地味なジオパークを、どうしたら人の興味を引き付けるようにできると思うか。それを、今、皆で語れる状況にあるか。

那須烏山：地味かと言われると正直地味だと思う。特に高齢者は、もともと昔からあったものを、こういうものだったのかと理解する程度かもしれない。しかし、公園として触れて見てもらうことが大切なことだと思っているので見てもらえるような活動は続けていきたい。

----- 机上審査 -----

委員長：ジオパークもできてから10年が経ち、いろいろな問題が明瞭になってきてひとつの転機を迎えている印象がある。ジオパークは何なのかという共通の認識が、10年ジオパークを行っている地域でさえ、できていないところがある。ジオパークが何であるか、いまさら聞けないということだった。しかし一方で、今は新しくジオパークを始めようとしている地域も10年前の原点に帰った印象があるし、ジオパークは何であるかということ問い直す人が増えてきたことは嬉しいこと。それぞれの認識でなく、共通認識を持とうとしているように思う。また、今日のプレゼンで感じたことは、知る・見る・食べるということを通じてきたのに、食べる話がほとんどなかったのは寂しい。また、日本は海の国だということも言ってきたのに、土佐清水でも海の話はなかった。海底でどうなっているから黒潮が反流してくるといふ海底の地形を見せないといけないのに触れていない。日本は海の多様性を通した様々な暮らしや歴史があるはず。そんな基本的な問題も考えながら審議を行っていきたい。

一資料確認

委員長：議事録については事前に確認しているので、この会議終了までに何もなければ了承と

したい。

【立山黒部】

委員：最近行っていないので、もしどなたか最近行かれたかたがいれば。

委員：アルペンルート観光でジオパークのアナウンスをしているのか。

委員長：やっていないという答えだった。富山の市民はほとんど知らない。

委員：富山空港に帰省の度に降りるが、ジオパークの文字を見ることがない。

委員長：街の中でもそのようだ。

委員：特に現地審査で見るべきところについてリクエストがあれば伺いたい。

委員長：書類だけで保留にしてもよい。

委員：1年以上、世界ジオパークとしての活動を実質行っているのが条件であるところ、とてもそのような段階ではない。日本ジオパークのままでも十分であると思うので書類のみで現地には行かないというのではどうか。

委員長：ネパールのことについてご存じの方は。

委員：ジオパークの事務局が関与してやっているのかどうかがよくわからなかった。

委員長：ジオパークはとってつけた感がある。

委員：1年以上、ということになって気になったのは、一体世界としてのジオパーク活動はいつ始まったのか、ということ。テーマが変わってから実績がどのようになったのか。世界ジオパークの基準に合った活動が1年間されているかという疑問がある。その点、書類のみで判断する理由にはなるとは思った。

委員：そもそも世界に類がない、と言っておいて、ヒマラヤというのはどうか。糸魚川と隣接していることで、違いを見せないといけないということがあり、飛騨山脈の隆起を強調され、世界に類がない、と言ったのだと思うが、類がないのにヒマラヤと比べるのはテーマとしてはプライドがないと感じた。

委員長：グラフはよかったと思う。

委員：糸魚川の隣ではたいへん。山脈の隆起は糸魚川でも見られるので、糸魚川でやるか、一緒にやるかでよいのではということになる。

委員長：日本ヒマラヤは糸魚川との境にあるのか。

委員：境の山脈に当たる。

委員：糸魚川と一緒にやるように勧告されると思う。今年、タイのサトゥンというところが申請するのだが、そこはランカウイジオパークから見えるところにある島。ランカウイの科学者と会合を開き、お互いのジオパークの特徴を確認し合い、申請書に明記した。それくらいのことをすれば出せるかと思う。

委員長：富山市民はどう関与しているか。

委員：JGNの再認定があるとすれば、そもそも、その時に問われることになる。最初から、富山のまちなかでどうするかということが、課題になっていて、実際には啓発活動をやってもいるが、やる気になればいろいろなことができるのにしていないとしか思えない。

委員長：最初に富山市民と一緒にできるのかということに対して答えがない。

委員：街に近いところにジオサイトがありながら、ブラタモリのような街歩きジオツアーがない。

委員：簡単にできそうな「立山写真コンテスト」をやるとか。そうすると市民も参加しやすいの
だろうが。

委員長：富山市の予算の問題があるのか。

委員：そうではない。富山の小中学生が学校の授業の一環で立山に登ることになっている。立
山を謳うのであれば、やはり富山市も入るだろうと。

委員長：その時にジオパークのことを説明しているということか。

委員：説明しているということだが、今日の説明では一切触れてなかった。立山信仰の歴史文
化については立山博物館の人が説明するがジオの説明はしていない。

委員：日本ジオパークとしての実績をもっと積んでから世界を目指してと言うしかない。やは
り海を入りたいから、富山市は外せない。

委員：何らかの形で何が問題かということをお伝えしなければならない。今回の資料とプレゼン
だけでなく、何かやってもよいのではないか。

委員長：現地審査をするということか。

委員：してもいいかと思う。却下できる根拠があるわけでもないかと。現地に行って直接現地
の人に指摘したほうがよいのではないかとも思う。資料だけで判断するより、実際に見て具
体的に指摘したほうが先方にとってメリットになるのではないか。

委員長：書類審査だけで現地審査はしないと言いにいくということか。

委員：現地審査として行くと、先方も過大な準備をするので、お互い無駄がある。

委員長：現地審査はしない、と決めて。

委員：その上で、行って今後のアドバイスをするのか。

委員長：私が行ってもよいのだが、誰かが行って説明会をするというのならよいのかと思う。

委員：現地審査すると言ったら（良いところだけ見せようと）作るので本当のところは見えな
くになってしまう。

委員長：霧島、桜島のときはどなたか説明に行ったか？

委員：世界ジオパークネットワーク事務局長を呼んだが本委員会からは行かなかった。

委員長：委員会としては行かなかったのでやるとしたら初めてになる。

委員：説明会と名付けるかどうか。イエローカードを出したあとに行くというのは慣例としてあ
るが。

委員長：イエローカードという言葉は使わないようにしよう、ということもあったが。

委員：結果を伝えるために現地のヒアリングはしたほうがよい。行かずに結果報告書を書くの
は厳しい。落とす理由は書けるが。

委員長：聞いてきたらそれに対して応える必要があるのでは。

委員：それは結果報告書で反映させる。

委員長：結果報告するまでに聞きに行くということか。

委員：結論は出した。現地審査はしないが、報告書を書くために詳しいことを聞かせていただ
く、ということ。形式的に結論を出す。世界ジオパークとしての1年間の活動が要件として
ある。今回少なくとも世界ジオパークに向けてテーマを変えた。

委員長：委員会の役目は落とすことではなくてジオパークを育てるということなのでそうしますか？

委員：あくまでも公表されている審査プロセスは書類審査とプレゼンで一度結論を出すということになるので、そこはきちんとプロセス通りにして、現地に行くのはその後に、フォローする、つまりアドバイスをしていくために行くという立場でいかないと、結果を覆してくれるのかという期待をもたせてしまうことになる。よって結果は出さないといけない。

委員長：それはそうだ。委員会の結論として見送りですか。

一同：見送り。

委員長：見送るが、結果を説明することはどこかで続ける。

事務局：委員会の判断は見送り。理由について書いたものを提出。その後、現地からの要請によっては、説明に行くというのはこれまでもあった。

委員：結果報告書は結論だけではない。(現地に行かなくても)理由は形式的なものなら書けるが。

委員：さきほどの議論にもあったように世界を目指すうえで、誤解されている点は正すべき。ネパールでの活動を国際活動と言っているが、実際はネパールに行って交流をしている人がいるから国際活動をしていると勘違いしている。そういったところをもう一度指導して、きちんとしたユネスコ世界ジオパークとしての活動をするべき。

委員：霧島と桜島錦江湾の場合は、GGN 事務局長のマルティーニさんが来日して報告書を作ってくれたので、JGC としては詳しい報告書を書かなくて済んだ。

委員：そうではない。委員会終わったその日のうちに直接口頭で説明をした。その後 1 枚紙の報告書を出した。

委員：それ以外の書類は JGC としては出していない。

委員：ない。

委員：マルティーニさんが来たので地元へのアドバイスはできた。今回、我々は 1 枚の書類だけでよいのか。

委員長：それでよい。

委員：出した後、呼ばれて行ったときに報告書を別途書けばよい。

委員：聞いてきたことを皆さんに確認して報告して出すというのは。

委員：それはどちらでもよい。

事務局：この委員会の審議結果として結果を出すので、今日の段階での理由を付して回答する必要がある。その後確認をして、というのではないと考える。

委員：結論はだす。これから改善してほしい点をいつも書いているがそれは結論とは関係ない。

事務局：それはその後の話。追加するのは先方から要請されていった場合、内容は多少変わる可能性があるが、結果報告書はここでの審議内容が付されて送るだけのことだと思う。

委員：それを早めに出して、要請があったらいく。

事務局：要請があったら行って説明をするということをお願いしたいと思う。

委員：自動的に来年再審査。それと結局ダブるので、あまり丁寧にする必要はない。世界申請する際に何が問題だったかという観点で説明するにとどめないと。

委員：その線引きも難しい。

委員長：結論を出した後に先方がどう対応してくるかを見ることにする。とりあえず説明の役目をお二人にお任せする。次に国引きから4地域の審議をお願いする。

委員：霧島のときは、直後に説明をしましたよね。

委員長：した。

委員：今日やりますか。

委員長：する必要はない。

委員：今日結論だして、結論をここで出した後いつも連絡するが、連絡はどうか。

事務局：通常は現地に行くことも含めて電話連絡している。今日の結果は事務的に報告させていただきます。

委員：要請があったらそれに応える。

委員：それでは何かあったら我々が対応するということで了解した。

【国引き】

委員：問題点はいろいろあるが、現地審査に行ってどのように改善しているかを確認したい。島根大学が大きく関与しているが、もっとジオパークの担当者が対応してくれたらよいのだが。

委員長：先生たちがいろいろな分野で関わっているのは間違いない。

委員：島根半島と中国山地側とその間を埋める中海のところに文化があるので、そこを島根大学がきちんと研究してくれて、縄文の時代以降どんどん埋まっていく過程、防災、洪水、風土記の時代との比較など、数千年の間に陸が繋がって国引きの話ができたというほうがおもしろいと思う。

委員：日本海形成の説明はサイエンスではないので、だめではないか。国引きジオパークという名前自体いけないのではないかと思う。

委員：そのような自覚はされていた。

委員：国引きという名前は誤解を生むことにもなりかねないので、それならば名前を変えたほうがよいかもしれない。

委員：国引き神話にでてくるような景観がどのように生まれたのかという説明をしたほうがよい。

委員長：現地審査は行くとして、どんなことを話題にするか。

委員：島根半島というのも。

委員：どこまでが半島か難しい。

委員：3つのエリアをどのように統合して説明していくかが問題。今日のプレゼンでそれがなかった。

委員：日本海形成に神話を使うな、ということ。

委員：島根半島がバリアになって中海が埋まっていく、という話のほうがおもしろいと思う。

委員長：松江市もジオパーク構想に入っているのですね。

委員：名称は再度検討したほうがよいのではないか。

委員：現地審査に行く前に事務局から、名称について委員の大半がひっかかるという見解を伝えることはできるか。現地審査でこのような話をしてよいか。

委員長：全く構わない。

委員：ゆざわのときも現地審査のときにテーマが変わっていた。

委員：出雲というと松江が問題になるので。

委員長：もうひとつ、朝鮮半島の問題がある。また、海の話があまりなかった。海から神社をまわることができ、特徴のある信仰がある。

委員：申請書には触れてあったが。

委員：申請書の段階ではマネージメント、マーケティングはうまく考えてあった。このへんの実態を確認すべき。

委員：黙っていても人は来るところ。ジオパークとどう結びつけていくかが大事。

委員：箱根も同じ問題を抱えている。39：33

委員：特定の温泉地域に人を呼び込むためのジオパーク構想、というのが読み取れてしまう。

委員長：そういうことを現地で確認するということがよろしいですね。

一同：同意。

【土佐清水】

委員：行かなくてよいと思う。メーリングリストにも流したが、歴史文化サイトの設定ができていない。専門員によると、やっていないわけではない、という趣旨の答えだった。一応サイトとしてリストアップはされており評価はしているのだが、という話だったが申請書に出なければ、傍からみると地質のことしか触れていないようにしか見えない。よって今のところジオパークではなくてジオロジカルパークのような気がする。土佐清水地域の人や文化とジオを繋げようとしているようには見えない。そのため地域遺産の洗い出しがまだ不十分なのではないか。短い準備期間で一気に立ち上げた印象が強く、地元の人が冷静に動いていないように感じる。よって冷静になってもう一度ストーリーを作ってほしい。申請書にも地域の農業、水産業、環境保全をジオストーリーに関連づけることによって地域の発展云々と書いてあり、ストーリーという言葉が出ているのだが、歴史文化、人に近い部分が見えてこない。信憑性がない。申請書にもないので（プレゼンで）聞いてみたが、非常に専門的な話になった。そういうことがガイドさんに伝われば、非常にジオロジカルパークとなってしまう。にもかかわらず、目的として観光客を呼びたいとしている。そのような難しい話をして観光客が来るなら他のジオパークはこんなに苦労しない。そのへんの戦略が立てられていない気がした。

委員：私も同意見だ。資料を拝見すると2016年からいろいろなことが整備されていて、きちんとジオパークとして活動して準備できているかという問いかけをしたときに、今ようやく形が見えてきてこれからです、というような返事だったので、これから実証していく段階なのかと思った。今、ジオパークになるかならないかの審査として行くのはまだ早い気がした。今までは足摺岬観光で頑張ってきたが、あまりお客が来なくなったのでジオパークで活性化をすることなのだが、足摺で人が来なくなってジオパークで人を呼ぶには、組み立て方をかなり練っていかないと難しい。アクセス的には難しい部分があるので。生活部分とジオの部分はまだ繋がっていない。大地の公園というところの印象がまだ薄くて地質公園の印象が強い。普通の生活とどう繋がるかというところはまだこれからいくらでも掘り出していけそう

な気がするので、来年に是非見てみたいと思った。

委員長：すると、見送りということですか。

委員：見送りでよいと思う。しかし土佐清水は以前から準備していたのにうまくいかなかった原因は何なのだろう。職員が変わっているということか。

委員長：いや、そうではない。

委員：土佐清水で何回か講演をされているが。

委員長：熱心に行っている人は一部で全員ではない。高知大の先生は今回初めていらした。ジオの意識を持つようになった。

委員：研修をしているのなら室戸ジオパークからヒントを得ることをしたらよいのでは。

委員長：交流はしている。一部の人はできている。

委員：室戸とは違うということ意識している。

事務局：活動年数として準会員になってからの年数をいうと、国引きは2012年から5年、土佐清水は2014年から3年、十勝岳は2015年から2年、那須烏山は2016年から1年。

委員：確かに、地元の人に無理強いするよりはもう1年待ったほうがよいと思う。

委員：見送り理由として、さきほどあったようにジオロジカルパークとしての印象が強いという点は説得力がある。

委員：去年から本格的に活動を開始していて、効果とか地域の人との連携などを検証して発表してもらいたかったが、それを感じることができなかった。

委員長：タイトルにはあったが中身がなかった。

【十勝岳】

委員：なぜジオパークに申請したのか見えない部分もあるが、現地に行って確認が必要と感じた。

委員：ここもエリア名を変えたほうがよいのではないかと。十勝岳ジオパークといいながら内容は十勝岳だけでなく、ラベンダーや青池がある。そういうところで防災教育でもないし、ここも二つの地域名を合わせたほうがふさわしいと思う。

委員：ここは火山との共生。短い時間では話さきれていなかった。88年の噴火の後、突然温泉が湧いた。環境省が温泉場を作ってくれて、噴火にまつわるスポットがたくさんあるので、現地審査に行ってもらえればよいと思う。

委員：パッチワークなどにしている波状丘陵の地形の原因は3つほど言っていたが、これは明らかに氷期の周氷河作用の独特の地形だということを説明する必要がある。

委員：申請書の中にオーバーユースの問題があった。観光客がたくさん来て危機感を持っていることに対して、どのように対処しているのかをもう一度確認したい。

委員長：少し触れていましたね。

委員：ジオパークで保全に力を入れるのは良いことだと思う。長期的にどうやっていくのかを確認してきてもらいたい。

委員：ここは事務局が2局体制であまりうまくいっていないのでは。

委員：旭川も手を挙げていますね。一緒にやったらどうかと言ったのだが、旭川の議員さんから聞いた話だと美瑛と富良野の関係より旭川との関係はもっとよくないそう。名称に関して

は自分の地域をもっと大事にするという観点から十勝岳でなくてもよいと思う。

委員長：現地審査は行くこととし、自治体の中をしっかりと見てくるということでよろしいか。

一同：同意

【那須烏山】

委員：まだまだジオパーク活動をしているという段階ではない。4月に推進室ができて5月に申請というのはどうか。今回は現地審査を見送って、もう少し活動していただくほうがよい。

委員：これでジオパークに認定されてしまうと、あれだけ熱心にやってくれた中学生に申し訳ない。

委員：こちらが地味だと言ったときに反論できなかったのはだめだ。地味ではないと思うが。

委員：ジオの資源をもう少し宇都宮大学と絡んで研究したらよいのではないかと思うのだが。中学生の理科クラブの域を出ておらず、もう少しサイエンスの部分を強化すべきだ。

委員：宇都宮大学は今、適当な先生がいない。昔、阿久津先生という地質の先生が熱心にされていたのだが、辞められてしまったので。博物館もあまりいない。

委員：有名な論文を書いているのは産総研。

委員：確かに化石も出るので研究していたのだが、教育旅行をジオパークならわかるが、ツーリズムと言われると何か工夫がいる。地層がどの時代だったのかというのはわかるはず。

委員長：シモツケコウホネがでてきたので、これはすごい植物が登場したと思ったのに、中学生レベルの域をでなかった。本来なら世界的な大発見で、花で新種を発見するなど最近めったにないことなので世界的に話題になるはず。その点をもう少し学術的に説明してほしい。植物に関しては、アポイ岳の鉾山植物くらいしかあまりでてこない。もっと取り上げれば、かなり特徴のあるジオパークになると思う。

委員：そういうところでまだまだ残念な部分がある。

委員長：財産はたくさんあって見送りにするのは残念だが、もう少し継続して活動してもらうことにしますか。

委員：今回、文化・歴史的な側面が聞けなかったのとツーリズムをどのくらい考えているかという点がとても抜けていて、地質だけに力点がおかれてしまった。

委員：例えば、申請書の中には烏山線をジオ鉄としてジオパークと結び付けたいとある。既に行っているのであれば評価するが、まだやっていないということがたくさんある。「していきたい」ということをまずやってみれば観に行く。

委員：文化サイトのほうは特徴の欄が空白であり、練り上げができていない。

委員長：それでは、さらなる準備活動と発展を期待するというで見送りにしますか。よろしいですか。

一同：同意

委員長：以上で（夏の）現地審査対象は4地域（UGGの再審査2地域含む）となった。委員会が終わったらそれぞれ連絡を入れる。

委員：この委員会後、すぐ連絡をするわけだが、きちんと記者会見したほうがよいのではないか。

委員長：記者会見するには準備が必要。現地審査後の審査結果を出したときはするが。

委員：現地審査に行かないというのは見送りの結論を出したということだから委員会としては（記者会見を）するべき。

委員長：記者会見するには予め連絡しておかないといけない。

委員：委員会の結論としては次回の委員会で行う。実際は見送りと決めたのだが、発表は一括して行う。

委員長：今回の見送り地域と新規認定地域の発表は記者会見できちんと行う。

事務局：昨年の霧島と桜島錦江湾は見送りを決定したということは9月の記者会見では触れていない。

委員：新規で現地審査に行かずに見送りになるのはこれが初めて。今回は現地審査に行かないということを決めたただけであって最終結論ではなく、決定の日付としては、9月の委員会ということなのか。それとも現地審査に行かないので見送りが決定ということであれば、記者会見を開くか、それができないならせめてプレスリリースをするべき。質問にも誰がどう電話で対応するかを決めておくべき。

委員長：今日はウェブサイトに掲載することだけでよいのでは。

委員：地元には今日中にどうしても伝えてください。地元の事務局から先にどうなったか問い合わせがあるのはよくない。その前に文書を発出してください。それが難しいのであれば今日中にウェブサイトに掲載し、質問があれば対応できるようにするべきだ。

事務局：今日の結果をなるべく早くウェブサイトに載せる対応をし、電話での問い合わせは事務局で受け、答えられないものは委員に対応していただくことにする。いつもプレスリリースの文章をこの委員会で作成しているが、それがないので、ウェブ上の掲載は、冒頭の部分だけになる。各地域に出す文書はこれから委員のほうで決めていただく。

委員長：次の議題。ユネスコ世界再審査の山陰海岸と阿蘇について。

事務局：ユネスコ世界ジオパークの再審査については、昨年は秋に日本ジオパーク委員会の現地審査を行っているが、12月の委員会で結果がでて翌年の1月にはユネスコへ正式に申請しなくてはならないということだ。たいへん厳しいスケジュールであった。そこで今年度の阿蘇と山陰海岸は夏に現地審査をするということを前回の委員会で中川委員から提案していただいたので、今回の新規申請地域の現地審査に加えて、その2地域の現地審査をお願いすることになるのでご承知おきいただきたい。また、7月から8月にかけて4つのユネスコ世界ジオパークのユネスコによる審査が行われるが、ナショナルコミッティーとしてJGCのどなたかが行っていただく必要があるのか。必要があるのであれば委員会として準備をさせていただく。ただ、4地域に意向を確認したところ旅費を出してまで来ていただくことは希望していない、とのことだった。

委員：旅費のところをきちんと決めたい。現地審査に同行するかどうかという部分についてもお決めいただきたい。

委員：JGCは審査に責任を持たなくてはならず、審査に関しては同行すること、という文書があるので、やはり同行したほうがよいと思う。

委員：旅費の問題ではなく、UGGに申請する上でJGCが同行するのは必然ということ。現地のほうにはナショナルコミッティーの権限で行く必要があると決まれば、旅費についても負担してもらおう可能性があるということ伝える。

委員長：方針としてはそのようにしますか。あとはどなたに行ってもらおうか。

委員：今決めたほうがよい。案はあるか。

事務局：ない。日程については資料5にある。

委員長：行ける人が行くしかない。

事務局：現地との調整もあるので、個別に対応したい。旅費は現地で出してもらおうということ
でお願いする。しかし、年度途中ということもあり、各協議会でどれだけ対応できるか不明。

委員：ユネスコ国内委員会の方も来られるのか。

ユネスコ国内委員会：日程の調整をした上で、旅費を含め、すべて行けるかどうか検討中。

委員：来年度以降については、ここで決定したので必要経費だということは予め事務局から案内しておくということですね。

事務局：来年度以降は、今日の決定をうけて、ご案内する。この4地域については7月に行われるので。

委員：もしだめなら（協議会で出せないなら）、何か方法を考えるか。

事務局：検討したい。

委員：先ほど、ユネスコの再審査で JGC 委員が行くことになっていると言ったが、正確には希望すれば同行する、の誤り。よって、希望しない場合は必要ない。

事務局：現在、委員会としては、希望により調整の結果によって決めるということですね。

委員長：希望するということを決めたということ。次、審査方針について。

事務局：内容については昨年度のものに手を加え、メーリングリスト上でご意見をいただいたところ。実際が変わったところは現地審査にあたってということ。添付の自己評価表については昨年の現地審査員研修会でまとめられたもの。またその一部は翌日リーダーがとりまとめたものを反映させた。今回の審査以降にまず使ってみていただきたいという提案。点数が書いてあるが、点数化というより、漏れのない審査を行うために審査項目としてお使いいただければと思う。

委員長：委員会の内部資料として。

委員：そうでなくて、各ジオパークが自分のところを評価するのに使うのではないか。

事務局：現段階ではそこまで整っていない。最後の頁で防災、減災の部分や持続可能な経済があるが、点数は入っていない。項目として整理中ということ。

委員：これを作っていくためのプロセスとして現地で使ってもらおうということか。

事務局：はい、まずは皆さんの手控えとして。

委員：基本は自分たちが点検したものを審査員がチェックするための材料なので、まず現地にこれを広めて点検してもらってください。その上で確認する時間が必要。

事務局：それは可能だと思う。

委員長：主旨はそういうことですね。

事務局：まずは皆さんで使っていただくのみの段階と理解していたが、今ご提案いただいたとおり、まず各地域に送りセルフチェックをしてもらった上で戻してもらう。

委員長：これを作成する目的は、最終的に自己評価の資料として、手引きになるようにするために試しに使用してみることが必要、ということか。そういう認識でよいか。

事務局：わかりました。

委員長：今回の対象としては、さきほどプレゼンした地域だが、見送ったところはどうするか。

事務局：現地審査の2地域に送ってセルフチェックをしてもらう。

委員長：見送ったところは？

事務局：参考として

委員長：現地審査に行くところだけに送る。

委員：これは委員会資料なので、今後資料として掲載されますよね。

事務局：載せます。未定稿ですが。

委員長：これについて意見を求めるか。今回は現地審査に行くところだけ？日本だけ？阿蘇と山陰も？

委員：UGGの阿蘇も山陰も日本ジオパークネットワークの再認定審査だから、どうしますか。

事務局：世界の審査と同じものを踏襲している。UGGの場合は申請書にユネスコの評価表が添付されてくるが、この段階ではいれていただいてもよいのでは。

委員：UGGは世界の基準で出さなくてはいけないところを日本の基準で出すということになるので、混乱するかもしれない。日本の新規と日本の再認定のところだけにしたほうがよいのでは。

委員長：具体的には国引きと十勝岳に渡す。

委員：あとは日本の再認定だけに渡すのでよいか。

委員長：それでよいですね。そうさせていただきます。次に現地審査担当者について確認。

事務局：国引きと十勝岳の日程については、これから調整していただければ。

委員長：現地審査の対応について。

事務局：その前に、再認定については審査員についてご意見をいただいていますし不備もあるので、今日の確認は夏の審査のみとさせていただきます、メーリングリスト上で連絡する。

事務局：現地審査の対応について。前回の現地審査の一部の地域から審査員のほうに、高価ではないが、菓子類などの多くのお土産物が送られてきた事例がある。ジオパークに関連する商品でもないようなものもあった。産総研が事務局を担っていた際に、国家公務員の倫理規程に沿って現地審査を行うということを決めていただいているので。

委員：決めたのは倫理規程に沿って、ではない。

委員長：そのとおり適用はできないということですね。

委員：そうです。

事務局：飲酒をしてはいけない、というようなことは書いていないと思う。通常の交流については認められている範囲と思う。ただ、昨今の歓迎会の状況を見ると多少派手なケースも見受けられるので改めて誤解のないようにしていきたい。

委員長：この議題を挙げている主旨は何か。何か問題があったのか。

事務局：さきほど申し上げたお菓子を送ってきた件であり、きわめて緊急性のあるものではないがちょうどよい機会と思ひ議題にさせていただきました。8月くらいに事務局長会議をする予定なので、委員会で話し合いをしていただき、事務局長会議で議題に取り上げたい。もちろん懇親会は、直接委員の意見を聞けるので地元にとってもありがたいことだし重要だとは認識している。ただ誤解を招くようなことはしていかないようにしなければならない。提供する側の問題でもあると思うので事務局側として各事務局には伝えたい。

委員長：委員の立場によっても違うと思う。

委員：現地審査地域に、過度なお土産等のご遠慮くださいという旨を書面に記載したらどうか。

事務局：審査方針の手順の中に記載して現地に送ればそれで足りるのではないかというご意見もいただいたので、そのような対応もしていきたいと思うが、旅費、宿泊費についても今、事務局としてどうすべきか検討している。各地域と委員とで直接のやりとりのため、事務局では把握できていない。それが誤解を生むことにつながるといけない。

委員：旅費の支払いの仕方も各地異なる。

委員長：協議会が出すのでその規定によるため異なってくる。また、規定に従っているので大幅に不当なものにはなっていないのではないか。

委員：事務局を経由せずにするとしたら、それぞれの協議会の規定に従って支払うということを確認したとすればよいのでは。

委員長：公務員の規定があるから、それほど外すことはないのでは。それよりも、シンポジウムで呼ばれたときの謝礼のほうが問題。

委員：それについては事務局でコーディネートすることはできる。

事務局：今日は時間も限られているので確認までとしたい。

委員長：委員は現地の人と交流したいと思っていることを心得ていただければよいと思う。次、2016年度認定審査に対する課題改善報告の確認。

事務局：各地域からアクションプランとして改善報告がすべて提出された。これに対してはこれでよいという回答はせず、委員会として受領したというのみ回答している。

委員長：その内容を確認する担当がいる。

事務局：はい。すでにメーリングリスト上で確認している。

委員：すでに担当が確認しているので、ここでは何か問題があったかどうか報告すればよいのでは。

委員長：特に問題があった地域はあったかご報告いただきたい。

委員：箱根については当初あまり十分ではない内容だったので修正してもらった。

事務局：各担当者には事前に確認した上で各地域から提出してもらっている。

委員長：納得した形で提出していただいているという理解でよろしいか。

一同：はい。

委員長：ではこれは問題なしということで。次、委員の構成について。

事務局：昨年の1月に日本ユネスコ国内委員会よりナショナルコミッティーとしてJGCが機関認証されたことをうけ、ユネスコのガイドラインにあるナショナルコミッティーの構成要員に沿うことが推奨されている。現委員は来年の3月に任期が終了するので、その機会に現委員構成を見直す必要があれば、現段階から考え、できれば9月の委員会には方針を決定していただきたい。このままの構成で変更なしという選択肢も残す。配布した資料にはユネスコのガイドラインに合わせた項目をあげている。合計人数を記載しているがこだわっているわけではない。aのユネスコの国内委員会推薦は、文科省内のユネスコ国内委員会の推薦になる。b-1の学術専門家。これまでは関係5学会より各2名の委員を推薦いただいている。問題は5学会のみでよいのかという意見もある。b-2として地質調査総合センター、c環境保全組織関係者、d文化遺産団体、e観光団体関係者、f IGCP国内委員会。fは組織としてあ

るもの。g 国内ユネスコ世界ジオパークの代表者。現在ある 8 地域から代表を出す。h は関係する団体ということで JGN 推薦を入れている。また、教育関係がこの中に入らないので、日本独自のものとして案として入れた。h-3 は世界ジオパークの委員役員等である渡辺さん、中田副委員長を任期中として入れている。h-4 全国地質調査業協会。今日は意見をいただきたい。特に b の学術専門家についてどのように選ぶのがよいか。たまたま日本地球惑星科学連合 (JpGU) の事務局にはお世話になっておりこの件について相談している。学術専門家については、JpGU より、ジオパークの促進を行うことについては団体の目的に合っているので支援はできると言われている。選考委員会を組織して選ぶことも可能と伺っている。どのように選ぶのがよいのかは皆さんの意見を伺って決定したい。委員は 2 年任期なので、来年の 3 月末までが任期。

委員：現状の委員会がユネスコ国内委員会からも今の JGN の考え方に沿って行ってよい、ということも言われているのに変更しなければならない必然性を確認したいことと、いろいろな専門家を出すようにいわれているなか、学会に所属しているが現状どのようにカバーできているかを整理しなければならないと思う。学術の幅を広げようとしているのに日本地球惑星科学連合だけでよいのか。JpGU だけに話を持っていくのは得策ではないだろう。日本の学術の総本山である日本学術会議などに何らかの協力をしてもらえないか。もう少し広く声掛けできる方法がないか検討いただきたい。

委員長：地球惑星科学連合にお願いするのはよいが、その他の分野もある。日本学術会議は 2000 の団体がある。どういうメンバーを入れるかということはここで決めればよいこと。

委員：JpGU にお願いする必要はない。

委員：ここに考古学の名前を出していただいととても光栄だが JpGU の中に入っていない。

委員長：地球惑星科学連合への依頼は考えない。

委員：足りないと思われる学会を探してお願いします。

委員：足りない分野として、私も JpGU には学会としては入っていない。エコロジカルヘリテージを評価できる人がいないので、植生の方に入っていただきたい。

委員長：そうですね。

委員：それぞれの学会に支援組織を作ってもらい委員を出してほしいということを委員長名でお願いすることを考えては。

委員長：海の関係、食の関係など言い出すときりがないので、最低限もう一人この分野の人を入れないと、という議論が必要。

事務局：学会を増やすということは学術専門家の枠を広げることと理解するが、c、d、e、h の 2 は環境、文化遺産、観光、教育の部分は学術専門家に学会として入っていただいたほうがよいのか。

委員長：それは別の問題。

事務局：現在委員会のオブザーバーとして参加されている文化庁の方が d の分野で参加していただくことも考えている。

委員：オブザーバーの人にもっと助言をもらい、少し学術専門の幅を広げる程度でよいのではないか。

委員長：c とか d は学術分野ということでは言っているのではない。例えば、エコツーリズム協

会。ジオツーリズムと一緒にやりましょうと言ったが、例えば学術団体ではなくエコツーリズム協会ではどうか、という話。

事務局：観光団体というところにエコツーリズム協会との関係がでてくる可能性がある。

委員長：協定を正式に結んでいるわけではないので今は必要ないと思う。ただ学術の面では気になる場所であり、大事なところで抜けているところがあると思うので、それは議論してほしい。あまり人数を増やしていくということではない。定年を設けて入れ替えをする。

事務局：できればどの分野が必要かという議論と他の関係団体からの参加についてメーリングリスト上で議論いただければと思う。もしくは、日をあらためてお集まりいただける方で原案の作成をさせていただければと思うが。

委員長：さきほどの自己評価表を見て現地審査された方が、この分野の専門家がいないと議論できないではないか、と気づくのではないか。そのような声をひろってから議論してほしい。

事務局：例年だと2年に1度、1月に学会へ依頼状を出し、3月の理事会で決まるようだ。

委員長：ひとつ提案がある。再審査のやり方を少し簡素化したい。件数が増えてきて皆さんに負担をかけている。具体的には、認定あるいは再認定されて3年目に、こちらでガイドラインを用意し、我々が書いている審査報告書と同じような自己評価書というものを各ジオパーク自身が提出することを義務付けたい。その自己評価書を1年かけてこちらが審査し、すでにウェブサイトや資料などで確認できるものはよしとして、自己評価書で確認できない部分だけを現地審査に行き確認をする。それを付け加えた結果、審査報告書として自己評価書と現地審査の両方を公開して結論を出すという審査方式に改めてはどうか。そのひとつの目的として、ジオパーク自らが審査報告を書くことで認識を深めてほしいということと、あくまでも発展のためであるということ。また、自己評価書と委員の評価書の両方を公開することで審査の価値を公に知らせる。さらにはその報告書を通じてジオパークの宣伝をすること。このような審査の改訂を提案したい。もう少しこの案を練って文書にするので後日議論していただきたい。自己評価書の書き方のモデルのようなものを提示し、どのような報告書を提出してもらおうか3年目に書き方の講習会を行う。そして報告書で確認できなかった部分だけ現地審査に行き確認し、両方の報告書を公開して結論を出すというのはどうか。

委員：実は同じようなことをユネスコ世界ジオパークが考えていて、再認定の際に出す詳細な報告書と審査員が出すフォーマットを両方ほとんど同じにするという。

委員長：足りないところを補って結論だけは委員会が書く。原案を作るので後日ご検討いただきたい。次、今後の日程について。

事務局：予定表にあるように7月に審査が目白押し。新規現地審査は本日の審議の結果、国引きと十勝岳が決定した。次回の委員会は9月27日を予定している。午前中より第31回JGC、午後から情報共有会を計画している。再審査の現地審査に行く際に、地元の情報がなかなか共有されていない現状から、現地審査に行くメンバーのみで現地の情報交換をしたい。各地の実態の知りうる情報を持ち寄る場を設けたい。現地審査に行く委員と協議会の審査員が対象。情報を共有することでチェックするポイントを確認してもらうことを目的にしている。28日には審査を受ける側も含めた、審査基準の研修会を開催したいと考えている。

委員：そこでは評価表を使用した結果報告もするのか。委員長のたたき台もそこで議論するの

か。

委員長：その前には出すが。

事務局：はい。10月の下旬には山陰と阿蘇のユネスコに提出する現況報告書がでてくるのでこちらの書類の審査をお願いします。第32回12月の委員会は22日を予定している。10地域あるので。

委員長：1日みておかないと。

事務局：はい、1日予定していただいたほうがよいと思う。

委員長：以上。